

今月号の表紙を飾るのは金城幸博先生ご投稿の皆既月食の写真です。この編集後記を執筆する時点において、天文界限では約1,400年周期のレモン彗星が話題になっていることから、天体観測に勤しまれた会員もいらっしゃるのではないのでしょうか。日々の忙しさを理由に天体ショーをスルーしがちですが、たまには空を見上げる時間と心の余裕が必要だと感じました。

さて、本号では田名毅会長の九州医師会連合会第424常任委員会報告から始まります。その中でも入学者減少に伴う看護学校の存続が厳しい状況については各県共通の問題のようです。ご存知のように、令和8年4月に当県の北部看護学校（公益社団法人北部地区医師会）が名桜大学附属となる予定ですが、他県ではNPO法人化し、ふるさと納税による寄付金活用やリモート授業の導入、外国人学生の受け入れ等、さまざまな取り組みをされているようです。

次いで、涌波淳子常任理事の九州医師会連合会第129回定例委員総会報告です。その中で、「かかりつけ医機能報告制度」についての内容が紹介されていました。会員の中には既に修了証を得られた方もいらっしゃるかと思います。本制度については日医の会員、非会員を問わず多くの医師の参加が望まれるところです。本制度への参加が少ない場合、財務省が目論む診療報酬削減を目的としたゲートキーパー制度、すなわち開業専門医への選定療養費制度の導入が現実味を帯びるからです。ゲートキーパー制度では開業専門医へのフリーアクセスは制限され、日医が唱える面で支える地域医療は根底から覆されます。多くの医師の参加が本制度による医療体制が十分に機能していることを国へ示

す証となるため、多くの会員の皆様のご参加に期待したいところです。

生涯教育コーナーでは、金城秀俊先生による「口腔、咽頭、喉頭がんに対する経口腔的手術」と題し、昨今の疫学や機能性のみならず審美性を考慮した治療方法・治療方針が紹介されています。

インタビューでは、沖縄県立南部医療センター・こども医療センター院長に就任された重盛康司先生にお話を伺っています。前任地の県立北部病院では電子カルテ導入にあたり、ご自身でイントラネットを構築されたというエピソードには驚きました。

「乳幼児突然死症候群（SIDS）対策強化月間に因んで」では、沖縄県の乳幼児死亡率ならびに低出生体重児出生率が全国平均を上回っており、予防のための啓発と情報発信の重要性が示されています。

「医療安全と心理的安全性」からは、日頃から耳にしていた、リスク管理の上でヒヤリ・ハットの報告が多いほど良い傾向である、という理屈が分かりました。

安次嶺馨先生の随筆では、母親の妊娠前からの両親の生活習慣病予防が胎児・子どもの健康的な成長には重要であり、長寿県から転落した沖縄での啓蒙と早急な対応の必要性を述べられています。

今号も大変興味のある内容となっています。特に乳幼児突然死症候群のリスクや子育て世代の両親に対する生活習慣病予防について、長寿県復活を目指す沖縄において、診療科を問わない啓発活動が必要とされています。

広報委員 照屋 徹